

<「知るっば!久留米」 令和2年11月19日(木) 12:30~放送分>

久留米絣 ～第3回～ 久留米絣の今(2)

<ゲスト：久留米絣 山藍 重要無形文化財技術伝承者 柿原真木子さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば!久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

11月は、久留米の伝統産業であります『久留米絣』をテーマにお送りしております。

ゲストは、この方です。

ゲスト:柿原 真木子さん (以下「柿原」)

久留米絣山藍(やまあい)の柿原真木子と申します。

どうぞよろしくお願いいたします。

私は現在、広川町にあります久留米絣織元の久留米絣山藍で働きながら、

重要無形文化財久留米絣技術保持者会で伝承者としても活動しています。

また、日本工芸会にも所属しております、色々な作品を発表させていただいております。

坂本 そうなんです。手元の資料を見ているんですけど、数々の入賞経験があって、平成26年には日本伝統工芸展日本工芸会新人賞も受賞してらっしゃいますね。今日はそんなすごい方とお会いしているので緊張しておりますが、よろしくお願いいたします。柿原さんは、「国の重要無形文化財の指定を受けた技術伝承者」という非常に長い肩書をお持ちなのですが、まずは久留米絣の道に足を踏み入れたきっかけをお聞きしたいと思います。

柿原 きっかけは、本当に偶然だったんですよ。

今勤めている久留米絣山藍の主催者である山村先生が機織(はたお)り教室をしていて、そこに私の母が通い始めたのがきっかけで久留米絣の道に進んでしまったという感じですね。

あと、学生時代に油絵なども描いていたので、ものを作ることは大好きだったんですけども、こんなに長く絣の世界にいるとは思ってなかったです。

坂本 柿原さんのお母様が先に機織りを習っておられて、その送り迎えをしているうちに、柿原さん自身もしてみようと思ったのですかね？

柿原 そうなんです。

先生も忙しかったんでしょうね。

だから、先生に「手伝ってくれないか?」と言われて、いつまでも手伝い続けて20年…。

坂本 気づくと 20 年も経ってしまった…みたいな感じですね。
でも、なんかそういうのが自然体でいいですよ。
こういう伝統産業というのは、一子相伝であったり、ものすごく高い志を持って地道に努力を続けた人が成し得るような世界かなと思っていました。
柿原さんは割とすんなりその世界に入っていたということは、緋が肌に合っていたんですかね？

柿原 そうですね。やっぱり緋の仕事がとにかく好きだったんでしょうね。
仕事をしているとよく「大変でしょう？」って言われるんですけど、体力的なものは別にしても、きついか、やりたくないとか思ったことはないんです。
だから続けられているのかなと思っています。

坂本 それは、まさに天職だと思うんですけど。

柿原 はい、だから続けられているのかなと思います。

坂本 柿原さんは大変と感じたことはないのかもしれませんが、我々から見ると、やはりこれは大変な仕事だと思うんですよ。
私も工房の現場を拝見したことがあるのですが、まあこれが大変で気の遠くなるような作業をしてらっしゃいますよね。
染めたり絞ったりするときには体力も必要で大変だと思うのですが、せっかくの機会ですので、久留米緋がどのように作られていくのかを、柿原さんから少し解説していただけますか？

柿原 そうですね。こちらもよく質問をいただくのですが、基本的に久留米緋ってというのは、大きく分けると「括(くく)り」、「染め」、「織り」の3つの工程を踏んでいきます。
まずは「括り」についてお話しますが、粗苧(あらそう)ってご存じですか？

坂本 いえ、知らないです。それは、緋の専門用語ですか？

柿原 そうですね。粗苧ってというのは、実は植物の麻(あさ)なんですよ。
麻の繊維を裂いたものを使って、柄を括っていくんです。

坂本 紐(ひも)みたいなものですか？

柿原 そうなんです。括ってから藍染めを行うんですけど、染めた後に括っていたところをほどくと、そこが白く残っていくわけですね。

坂本 そこには染料が染み込まないんですね。

柿原 だから粗苧ってというのは、防染(ぼうせん)と言って染まらないようにするための作業なんです。

坂本 それって、やっぱりギュ〜っと強く締めなくちゃいけないですよ？

柿原 いえ、実はそれほどでもないですよ。
粗苧はしっかり締まって、ほどくときは嘘みたいに簡単にほどけます。

坂本 魔法のような技術ですね。

柿原 そのように縛っていたところを白く残すというのが緋(かすり)という技法ですけれども、
白く残っていたところを機(はた)に仕掛けをして織り始めると、きちんとした模様になるというのが
この久留米緋の魅力なんですよ。

坂本 括る場所とか、括り方といいますか、きちんとそれをやっておかないと綺麗な模様にはならないですよ？

柿原 そうなんですよ。そこが一番難しいところで…。

坂本 久留米緋は、最初に柄や模様をデザインされるということですね。

柿原 最初にデザインをした後に、模様をきちんと織物の上に描こうと思ったら、色々と計算をしないといけないんですよ。
この計算を間違ってしまうと、どんなに一生懸命括って染めたものでも、綺麗な柄にはならないので、そこが一番難しいところだと思います。

坂本 そうなると、うまくいかないと悲しいですね…。
ひとつがちょっとズレたら、ほかもどんどんズレていっちゃうっていう話ですよ？

柿原 そうですね。一般の方に緋の工程を見ていただくと、みなさん「大変ですね」とよく声をかけていただくんですけど、やはりどの工程も手を抜かずにキッチリしていかないと、絶対に織物として成立しないものなんですよ。
久留米緋ってみなさん身近に感じてくださっているんですけど、実はたくさんの技術がすごく詰まっている織物なんです。

坂本 柿原さんは、括り、染め、織りの全工程をおひとりでおこなうんですか？

柿原 そうですね。昔はたくさんの方が緋を作っていたので、分業制にしていたところもありました。
でも、今は従事する人がものすごく少なくなっていますので、全ての工程を織元さんの中でこなしていくのが、手織りの分野では主流になっていますね。

坂本 聞くところによりますと、以前は括り専門の方、染め専門の方、織り専門の方などがそれぞれいらっ

しゃったそうですね。

でも、今はそうではなくて、一か所で全部をやるようなスタイルになってきているということですね。

柿原 自分も一か所で全ての工程を行うやり方にしようと思ったきっかけは、やはり技術の継承を考えたからです。

今は緋の技術を伝承する人が少なくなっておりますので、分業だとその方が亡くなってしまったときにその技術が途絶えてしまいます。

だから、自分でできる限り全ての技術や手法を習得しておいて、次の世代の人たちに教えられるようにしたいというのがきっかけでしたね。

坂本 実際、ひとりで久留米緋を製作すると、一反出来上がるのにどれくらいの期間が必要でしょうか？
また、緋を作る工程で、どこが一番難しいとお感じですか？

柿原 最初に図案を起こしてから反物として織り上げるまでに、最低でも半年近くかかるんですよ。

作業工程はどれも難しいので、正直簡単な作業があるのかなって思うぐらいなんですけど、自分が一番苦手なのは、やっぱり図案の計算なんですよ。

計算をして、それが合わないといけないんですけど、私は数学が嫌いだったので、この歳までこんなに計算をしないといけないのかと思うぐらい計算するんですよ。

でも、そこはやっぱりプロなので、計算が苦手と言いながらも間違いがあっては絶対ダメなんです。

坂本 計算というと、一番最初の段階ですよ。

でも、そんなご苦労があったうえで、一反が出来上がったときの気持ちってというのはどんな感じですか？

柿原 やはり、初めて作る柄を機織り機にかけて、最初のひとつ、ふたつを織り出していったら、

そこにちゃんと緋が模様として成立したとき、やっぱりこれが物を作っている人たちの一番の喜びですよ、「あっ！合ってる！」というね。

単純ですけど、毎回、感動しています。

それが、やっぱり長く続けてきた理由かもしれません。

坂本 久留米緋の製作は、最初と最後に苦しみと喜びがあるような感じですよ。

柿原さん興味深いお話をありがとうございました。

お時間はつきませんが、時間も巻いているようでございますので、続きはまた次回ということで。

久留米緋に関する質問やお問い合わせについては、

歴史・重要無形文化財の伝統的な技術に関することは、

久留米市役所本庁舎12階久留米市文化財保護課内にある(公財)久留米緋技術保存会までお願いします。

電話番号は、0942-30-9322です。

また、久留米緋の販売など全般的なことにつきましては、

地場産くるめにあります久留米絣協同組合までお願いします。

電話番号は、0942-44-3701 です。

次回も久留米絣をテーマにお送りします。

柿原さん、来週もよろしくお願いします。